

第 6 講：8 「一寸身上に」

現代社会の発展と共に、私たちの心の成人も急がれている。ここでは、信仰に生きる先人の逸話に学ばせて頂き、今一度、信仰に生きる原点に立ち返ってみたい。

八 一寸身上に

文久元年、西田コトは、五月六日の日に、歯が痛いので、千束の稲荷さんへ詣ろうと思って家を出た。千束なら、斜に北へ行かねばならぬのに、何気なく東の方へ行くと、別所の奥田という家へ嫁入っている同年輩の人に、道路上でパツパツと出会った。そこで、「どこへ行きなされる。」という話から、「庄屋敷へ詣ったら、どんな病気でも皆、救けて下さる。」という事を聞き、早速お詣りした。すると、夕方であったが、教祖は、

「よう帰って来たな。待っていたで。」

と、仰せられ、更に、

「一寸身上に知らせた。」

とて、神様のお話をお聞かせ下され、ハツタイ粉の御供を下された。お話を承って家へかえる頃には、歯痛はもう全く治っていた。が、そのまま四、五日詣らずにいると、今度は、目が悪くなって来た。激しく疼いて来たのである。それで、早速お詣りして何うと、

「身上に知らせたのやで。」

とて、有難いお話を、だんだんと聞かせて頂き、拜んで頂くと、かえる頃には、治っていた。

それから、三日間程、弁当持ちでお屋敷のお掃除に通わせて頂いた。こうして信心させて頂くようになった。この年コトは三十二才であった。

この『逸話篇』のお話は、文久元年（1861）5月に、西田伊三郎の妻コトが初めて教祖の許にお詣りさせて頂いた時のことである。教祖は「夫も連れておいで」と仰せられたので、伊三郎も共にお詣りした。伊三郎は文久元年頃入信した。元治元年の「つとめ場所」ふしんには、伊三郎は昼8枚を献納し、翌慶応元年、教祖が針ヶ別所へ出かけられた時には、飯降伊蔵、山中忠七、岡本重治郎と共に、伴の一員として出向いた。伊三郎が39歳の時である。伊三郎は、その前後おやしきに住み込み、草創期の住み込み青年が勤めた農事手伝いや米搗きのひのきしんに励み、真実を伏せ込んだ。（『改訂天理教事典』718頁参照）

私たち人間は、「元の理」によって明かされているように、親神様によって創造された。そこに、親神様と人間は真の親子の関係にあるということが出来る。また、世界中の人間は、等しく親神様の子供として、兄弟姉妹の間柄であると教えられている。

とかく現代においては、身体やいのちをもののように考えるきらいがある。それは、直ちに自分のもの、他人のもの、人間のものという考え方につながっていく。そこに、いのちや身体を粗末に扱う結果も生まれてくる。今日、時代環境のめまぐるしい変化の中で、私たち人間は現代社会の大きな波にややもすると飲み込まれがちである。このような中で、親神様のみ教えを通して、改めて人間とは何かについて考え直し、自分自身を見詰め直すことは意味あることと思われる。

にんけんハみなへ神のかしものや
なんとをもふてつこっているやら 三・41

にんけんハみなへ神のかしものや
神のぢうよふこれをしらんか 三・126

めへへのみのうちよりのかりものを
しらずにいてハなにもわからん 三・137

と、「おふでさき」に述べられているように、人間の身体は皆親神様からの「かしのもの」である。そこには、親神様の自由自在の働きが及んでいるとお教え下さっているのである。さらに、人間の身体が親神様からの「かりもの」であることを知らないでいては、何も分からないとまで仰せられている。これは、「かしのもの・かりもの」の教えが、信仰の要となることを明らかにされているものである。

人間というは、身の内神のかしもの・かりもの、心一つ我が理。（明治22・6・1）

と、「おさしづ」に示されているように、人間の身体は親神様から貸して頂いているものであり、また、お借りしているものなのである。そして、心だけは自分のものとして使うことが許されているのである。ここに、人間とは身体と心をもつ存在であることが分かる。

人間は心だけではこの世に生きることはできない。心が「かしのもの・かりもの」である身体を親神様からお借りすることによって、私たち人間はこの世に存在することができるのである。換言すれば、私たちは親神様によってこの世に生かされているのである。このことを考える時、「かしのもの・かりもの」としての身体のもつ重要性に気づくことができる。それは、私たち人間は「かしのもの・かりもの」の身体を通して親神様と大きなつながりを持っているということである。「かしのもの・かりもの」の身体は親神様の十全の守護のお働きが及んでいる場であり、ある意味で、大宇宙に対して小宇宙とも呼ぶことのできる一つの世界である。私たちは、「かしのもの・かりもの」の身体を通して親神様と強い絆で結ばれており、このことから、また、親神様の深い思惑を身上にお知らせ下さるのである。

いかなるのやまいとゆうてないけれど
みにさわりつく神のよふむぎ 四・25

よふむきもなにの事やら一寸しれん
神のをもわくやまへの事 四・26

と、「おふでさき」に示されているように、身上に障りを覚えるのは、親神様の用向きに使いたいための手引きであるから、深く親神様の思惑を悟らねばならないのである。

また、「おふでさき」に、
しやんせよやまいとゆうてさらになし

神のみちをせいけんなるぞや 三・138

一寸したるめへのあしくもできものや
のぼせいたみハ神のてびぎや 三・139

と、述べられているように、病気といわれるものは、親神様が道を教えて下さっている、道教であり、意見、すなわちご注

（12頁へ続く）